

# 人生最後の語学

——タイ語と歴史的仮名遣い——

## 古田島洋介\*

日ごと無為に打ち過ぐすうちに、はや六十四歳。定年退職まで数年を残すのみとなつてしまつたが、最後の悪あがき、このところタイ語を齧つてゐる。たぶん人生最後の語学となるだらう。とはいへ、これがなかなか楽しく、最後の語学と悲壮感を以て取り組んでゐるわけではない。そのうへ何かと役に立つのである。

タイ語に手を染めた理由は二つある。一つは、漢字を離れた文字を学んでみたいとの気持ちである。日本の仮名は、漢字から生まれたものだ。ハングルは、原理・外見こそ漢字と懸け離れてゐるものの、正方形に収まる点では漢字や仮名と同じ、音節に組み上げるさいの構成法は漢字に謂ふ偏と旁(㇇・㇈)、冠と脚(㇉・㇊)などと軌を一にする。むろん、漢字と無関係な文字を欲するならば、アルファベットを用ゐるヨーロッパ語やく・ね・く・ね文字のアラビア語などでも好いはずだ。しかし、アルフ

ァベットは見慣れてゐるせゐか、どうも新鮮味に欠ける。逆に、アラビア文字はあまりに馴染みが薄く、今さら習得できさうもない。それに引き換へ、タイ文字は愛嬌のある形をしたインド系の文字で、書き方そのものが面白い。何しろ、文字のなかに○<sup>オ</sup>があれば、その○から書き始める決まりになつてゐる。つまり(㇇)のやうに○が下方にあれば、筆が下から上へ向かふことになるわけだ。結果として、漢字の二大原則「上から下へ、左から右へ」とは似ても似つかぬ運筆が要求され、まったく新たな心持ちで臨めるのである。

いづぞやタイの学会に参加したとき、隣りに坐つてゐた学生らしき青年に話しかけてみたところ、タイ人だとの由。いざ名刺交換に及ぶと、タイ文字では外国人に不便だらうとの配慮なのか、氏名がアルファベットで記してある。そこで、下から上に向かふ文字がどれほど速く書けるものか、ぜひ実見してみようと、「タイ文字で氏名を記してほしい」と頼んだ。その男子学生は快く引き受けて、アルファベットの下にタイ文字で氏名を書いてくれた。それを見ながら、下から上へと器用にペンを走らせる速度に驚くとともに、母国語として書き慣れさへすれば、筆画が下から上に向かふなど、造作もない技だと知れた。当然と言へば当然だが、知識人が母国語の文字を書きあぐねることなどあり得ない。考へてみれば、日本人とて、平仮名「あ・お・ぬ・ね・の・め・れ・わ」などを記すときは、下から上へ向かふ曲線を巧みに書いてゐるのだから。もつとも、通り一遍にタイ文字を覚えた程度では、たとへばバンコク市内の看板などを読みこなすことはできない。実際、タイ文字を学んでからバンコクに行つたときも、看板の文字がほとんど読めなかつた。たいていの場合、教科書的な字体ではなく、看板として見栄えがするやうな文字がデザイン化されてゐるからである。市中で買ひ求めた歯磨きのチ

ユーブに書かれてゐる文字もまた然り。それに比べると、レストランのメニューに記されてゐる文字のはうがはるかに読みやすい。トムヤムクン (tom-yam-kun) (日本式の「トムヤムクン」では絶対に通じない) が判読できたときは、バンコクの安食堂のテーブルで独り悦に入つたものである。

もう一つ、タイ語を手がけた理由は、タイ語が中国語と同じく孤立語だからである。私の知るヨーロッパ語は漏れなく屈折語だ。英語は屈折変化が例外的に衰へた言語だが、フランス語にせよドイツ語にせよ、豊かな屈折変化を残してゐる。韓国語は、日本語と同じく膠着語に属する。しかし、日ごろ漢文を読んでゐる身としては、もう一つ孤立語を学んでみたいといふのが長年の宿願であつた。それによつて漢文の特徴に関する理解がいつそう深まるはずだとの算段である。タイの大学には、外国人がタイ語を学ぶための語学コースが設けられてゐることも多いが、名門チュラーロンコーン大学の教授に伺つたところ、タイ語の習得は中国人が抜群に速いとの由である。同じ孤立語としての文法体系が中国人には理解しやすいのだらう。発音の点でも、中国語 (普通话) が四声を有するのと同様に、標準タイ語にも五声があり、声調言語といふ点で両者は共通する。

日本人にとつて、タイ語の発音が困難をきはめるのは事実だ。けれども、中国語を知つてゐれば、声調の存在そのものに抵抗を感じることはない。同じ発音でも声調が変はれば意味も変はるのは、中国語と同一の現象である。二種の「ウ」は韓国語「우・오」の違ひに似てをり、狭い「エ・オ」と広い「エ・オ」も韓国語「에・오」「애・어」の相違で捌ける。有気音と無気音の対立は中国語・韓国語 (激音/平音) と共通し、また (p, t, k) で詰まる促音節も中国語の南方方言や韓国語の終声子

音<sup>ハ</sup>母<sup>マ</sup>音<sup>パ</sup>「日・ロ・ク」などとの対応・連想で片がつく。語頭に母音が位置するとき、喉を詰める子音字 (ㄱ) を付けるのも、韓国語で0子音 (ㄱ) を語頭に置くのと似たやうなものだ。ついでに語順についても言へば、修飾語が被修飾語の後方に位置する点でフランス語に似る。このやうに、あれやこれや他の言語との類推を利かせれば、ある程度までは何とかなるのが実情だ。タイ語は、「この」「その」などの指示語をも名詞の後方に置く点で、フランス語とは異なるが。

ただし、いざ書くとなると、タイ語は甚だ厄介である。といふのも、英語などの綴りによつて我々が一つの常識として脳裡に置いてゐる「子音+母音」の順序が常に通用するわけではないからだ。たとへば、タイ語・タイ人の意を表す「タイ」<sup>Thai</sup>は「<sup>th</sup>ai」と書く。先頭の (ㄷ) が (th) に、次の (ㅍ) が (p) に、末尾の (ㅇ) が (ng) に対応してゐれば、事は易い。けれども、実際は (ㄷ) が (t) に、(ㄱ) が (k) に対応する。母音字 (ㅏ) が子音字 (ㅑ) に先行するわけだ。しかも、この単語では、末尾の (ㅇ) (本来は音価 (y) の子音字) は発音しない黙字だといふのであるから、恐れ入るしかない。前掲の有名なスープ名トムヤムクン tom-yam-kun (shum-kun) にしても、それなりに複雑だ。冒頭の (ㅇ) は /t/、(ㅏ) は /m/ に相当する。母音 (ㅑ) はどこにあるのかといふと (ㅑ) に見える (ㅑ) がそれではない。これは声調符号で、発音そのものではないのである。では、母音 (ㅑ) はどの文字が表してゐるのかとなると、何と正解は「ナシ」だ。(ㅑ) と (ㅑ) が連続してゐるやうな場合は、そのあひだに母音 (ㅑ) を挟み込む約束なのである。次の (ㅑ) は子音 (y) の音価を持つ。ただし /yam/ の (ㅇ) と (ㅑ) /m/ が現れるからといつて先頭の (ㅑ) と同じく (ㅑ) を記すわけではない。(ㅑ) に附された (ㅑ) が「母音+子音」すなはち /am/ に相当し、(ㅑ) で /yam/ となる。末

尾の〈ㄣ〉は、〈ㄨ〉が/ㄨ/に、〈ㄝ〉が/ㄨ/に相当する。〈ㄣ〉の〈ㄣ〉は、やはり声調符号だ。つまり、母音/ㄣ/を表すのは、〈ㄣ〉の下に附いてゐる〈ㄣ〉にはかならない。これで〈ㄣ〉が/kin/と発音されることになる。すべてつなげれば、めでたく〈shuínǎ〉 tomyankin すなはち「エビ」(ㄣ) 入り混ぜ合せ(ㄣ) 煮込み(ㄣ) スープの完成だ。

右の説明でわかるとほり、タイ語の母音字は、子音字の上下左右どこにでも現れる。加へて、綴り字には反映されない暗黙の約束事が少なくない。慣れるには、どうしても相応の時間が必要だ。

もつとも、タイ語の最大の難関は、同一の発音を表す母音字や子音字が複数にわたる現象かもしれない。母音字の例を挙げれば、〈ㄣ〉も〈ㄣ〉も音価は等しく/ㄣ/だ。姿形も似てゐるだけに、甚だ紛らはしく、いづれを用ゐるかは単語ごとに覚えるしかない。これが子音字になると、さらにややこしくなり、たとへば同じ/ㄣ/の発音でも〈ㄣ, ㄣ, ㄣ, ㄣ〉の六字がある。そこで、タイ人は文字を覚えるさいに、後者三字を例とすれば、「袋」〈ㄣ〉の〈ㄣ〉「兵隊」〈ㄣ〉の〈ㄣ〉「旗」〈ㄣ〉の〈ㄣ〉のやうに代表的な名詞を用ゐて区別するといふ。かはいらしい小学生たちが先生の後に続いて、かうした文言を唱へてゐるありさまは、想像するだにほほ笑ましい光景だ。

と、ここで私は想ひ起こす——あるとき母親がワ行の「ゐ」について「井戸の〈ゐ〉」と言つてゐたことを。今にして思へば、これはア行の「い」と区別するために幼いころ習つた歴史的仮名遣ひの覚え方であつたに違ひない。典型的な単語を以て同音の文字を区別するタイ文字の記憶法とまったく同じである。そして、重ねて想ふ——歴史的仮名遣ひで、かうした弁別を必要とする文字は、微々たる数にすぎないのではないかと。おそらく区別を求められるのは、主としてア・ハ・ワ三行のイ段

「い・ひ・ゐ」、ウ段「う・ふ」、オ段「お・ほ・を」、および、いはゆる四つ仮名「じ・ぢ／ず・づ」くらゐであらう。となれば、タイ語に比べ、記憶の負担は物の数ではあるまい。タイ語の習得に突出した語学の才が必要でないとすれば、歴史的仮名遣ひも常人にとつてさしたる重荷にはならないはずである。古典中国語音の面影をとどめる字音仮名遣ひだけは話が別だが。

黒船このかた、日本人は、同一の発音にしばしば異なる綴りが充てられる英語と格闘中だ。けれども、その伝を以てすれば、歴史的仮名遣ひなど些少の学習で事足りるに違ひない。そして、もし将来タイ語が有力な言語として普及し、英語に取つて代はつて国際共通語にでもなれば、我々は歴史的仮名遣ひを複雑だとして却けた戦後の国語改悪を心から恥ぢるやうになるのではないか。そんなことを夢想する今日このごろである。